

「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報

NO. 78

2021.8.31 発行

編集責任者：河地 清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第78回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ：『地域活性化を考える』

—いきいき地域づくりの実践例①—

—押沢台北をブラブラしてラブラブのまちに—



講師：豊田 洋一氏

第8回押沢台北ブラブラまつり」フラッグ

今回のテーマは、「地域活性化を考える」—いきいき地域づくりの実践例①—で設定しました。当フォーラムでは今日まで「ふるさと意識なくして地域の活性化なし」をベーシックな考え方として、「理論と実践」の両面からいくつかの実践例を学んでまいりました。

2回（H13.4）鳥居松本通り商店街の活性化・5回（H13.7）まちづくりの理論と実践（大塚俊幸氏）・6回（H13.8）近江八幡市のまちづくり実践例・11回（H13.12）高蔵寺地域の再生・12回（H14.1）行政による流通・商業政策（まちづくり三法、第五次総合計画）・講演（H15.4.5）情報化時代のまちづくり（月尾嘉男氏）・27回（H15.5）ふるさと創生を考える・38回（H16.4）地域活性化の本質的課題・39回（H16.4）地域商業・商店街・地域活性化（岡田千尋氏）・40回（H16.5）町内会の役割（中田実氏）・42回（H16.7）六軒屋町内会の取り組み事例・45回（H16.10）長浜市都市構想まちづくり事例（鳥羽都子氏）・56回（H17.4）地域活性化の本質的方法試論（河地 清）57回（H18.3）鳥居松地域の歴史と地域活性化の取り組み・59回（H18.6）まちづくりと地域活性化—中部大学学生に聞く—・71回（H19.11）味美のまちづくり—歴史を学ぶ—等々です。今回は、2021年（令和3年）8月7日（土）市民活動支援センター（ささえ愛センター）において豊田 洋一氏（中部大学名誉教授・ブラブラまつり事務局）に発表していただきました。コロナ禍 10名の参加者がありました。

《講演要旨》

高蔵寺ニュータウンの一角（東端山沿い）に位置する 320 世帯が押沢台北（2丁目、3丁目）町内会です。昭和 57（1982）年 5 月にニュータウンは完成しています。高度経済成長期に日本住宅公団（現在、UR 都市再生機構）の開発事業によって建設された正に新しいまちの出現でした。近隣に航空自衛隊高蔵寺分屯基地（弾薬貯蔵庫）がありますが、共存しながら今日に至っています。東側は岐阜県との境界となる山岳地帯で自然豊かな地域でもあります。住宅地購入の条件が 100 坪以上であったことから住居環境としてはゆとりのある住宅地域が形成されていることがこの地域の大きな特色となっています。

入居当初の 30 代 40 代の人々は高齢化し、引きこもり気味の暮らしが多くなることによって孤独死が社会問題となるようになりました。社会もプライバシー重視の風潮が広がり地域社会は、ご近所とのつながり、助け合う（共助）ということがどんどん希薄になっていってました。

そんな中、町内会の親睦行事として始まったのがブラブラまつりです。この発想は他市で行ったまちづくりの冊子づくりの成果を展開したものです。

『HOUSE FRONTーハウスフロント多治見のまちの家先デザイン手法ー』監修：多治見市住まい・まちなみ研究会 編集：中部大学豊田研究室（平成 21 年 3 月 多治見市建築住宅課発行）。

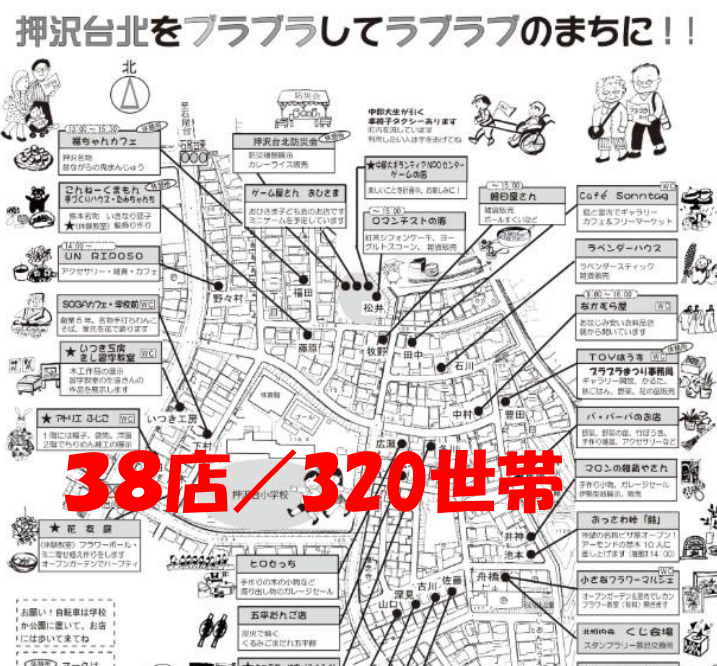
「家先でコミュニティー」という発想

その昔、縁台を軒先や生活道路に出して、涼んだり談笑するのが暮らしの日常でした。日本式家屋には縁側が在るのが標準的な家屋でした。戦後、そして高度経済成長期以降の生活様式の変化は、核家族、孤価社会、少子高齢化などの社会的背景のなかで、住環境にも大きな変化がでてきました。『人間社会は、好むと好まざるにかかわらず、毎日暮らす生活の場に根を張り、その地に留まる者の間には地縁という絆が存在します。しかし、今日の社会は、マイカー、コンビニ、SNSがあれば隣人との付き合いも、煩わしい人間関係も不要という風潮があります。「隣は何をする人ぞ」と無関心、無関係でも不都合ではなくなりました。それなりに理由もあります。多忙な仕事、高齢化、介護、等々地域の情報や隣人にまで気を配る余裕などないといった生活の現状があります。地域は崩壊の危機に直面しています。その昔、かつてのような、みそ、醤油の貸し借りから身の上相談まで、良きにつけ悪きにつけ「小さな親切大きなお世話」と揶揄されるような濃密な近隣関係が日々の生活の場であっ

一度、家先を開いて、まちの〇〇館をやらしてもらおうというのがこのまつりです。

呼びかけには、多くの人が賛同してくれました。すでに8回実施され、2018年には「住まいのまちなみコンクール」で「国土交通大臣賞」を受賞しました。

駐車場や庭を開放して、いろいろなお店をやります。参加は多く、前回の参加は町内会の会員数320世帯に対して38店舗で、9軒に1軒の割合となります。



この町には、こんなにも子どもがいたんだとびっくりするほど、子どもの姿が多い。大きな軍団をつくってやって来ます。ベビーカーを押した若いお母さんのグループ、坂道の多い住宅地を車いすでブラブラする人もいます。1回目からそうなのですが、外からのお客さんも多くあります。いろいろなネットワークでつながっているのだろう。

このまつりの良いところはいくつかあります。

家が中心

まつりの会場はそれぞれの家であり、主役はその家の住人です。そんな家が町中に点在し、住民はマップを片手に家々をブラブラします。いつもとは違ったゆっくりとしたスピードで歩いて町をブラブラ。行ったことのない場所に足を延ばしたり、車では見過ごしていたことを見つかったりと、気づくことも多くあります。

店になった家にはどんな人が住んでいるのか。その人はどんな趣味や特技をもっているのか。ゆったりとした時の流れの中で、店の住民と客となった住民との小さな出会いや交流が生まれています。

個人が中心

地域のイベントは、地域の団体が主催することが多い。大きい組織にはいろいろな人がいて、事なかれ的に処理されることも多い。特に、毎年メンバーが変わる組織においては、前

例主義で変化は望めません。

このまつりの真骨頂は、主役が個人であるということです。個人が自分の家で、自分の得意とすることで、自分や家族だけで楽しむだけでなく、みんなにもおすそ分けするというスタンスで行われます。個人が中心だから、つつい頑張ってしまうという側面もあります。頑張ってしまうても負担には感じません。

創造的で楽しい

大人にとってもお店屋さんごっこは楽しい。何をやるかは自由。個人の思いがそのままカタチになって、楽しい。終わった瞬間から来年はこうしようと考えたりします。

協力体制

このまつりは個人が出発点ですが、店をやるためには周りの協力が必要です。まずは家族です。家族の協力がなければ、家ではできません。でもそれだけではできない場合もあり、いろいろな協力体制に発展していきます。家族の延長としての親戚、嫁いだ娘、実家が応援に駆け付ける。今や、親戚が集まる恒例行事となって、前日から親戚がやってきて盛り上がっている家もあります。

また、仲良しご近所の協力で出店という事例もあります。ある人が自分の作品の展示を希望しましたが、家が通りから奥まっていたため、通り沿いの家が駐車場を提供、店番も協力してみんなで一軒をだしました。似た事例ですが、3家族が共同して、一軒の庭でカフェを出店。ケーキの準備は女性が行い、当日の給仕は男性が行っています。

このように、良い点を持ったブラブラまつりは、内に外に発展しています。

外へ

このまつりはどこでもできるまつりで、2017年には、お隣の町内会でも始まりました。2018年に賞をいただいてからは、大阪の多摩や泉北のニュータウン、岐阜県の住宅団地からの視察も受けました。2020年には岐阜県多治見市の滝呂台で大々的に準備されたが、コロナのため延期が続き、年度内の開催は断念されました。

内へ

このまつりの最終目標は「普段になる」こと。ブラブラまつりをもっとということで、毎月カフェを開きます。多い月で5軒が家を開きます。開催日は、ブラブラまつりが10月の第2土曜日。それにちなんで、毎月第2土曜日と決めています。

「普段になること」をさらに推し進めるため、普段のブラブラを支援するためのベンチを町内に設置しました。費用は賞金。町内のお買い物バスのバス停2か所、市の水道施設の管理用駐車スペースを開放してもらって1か所、その他2か所の計5か所。免許を返納した住民の駐車場にも試験的に1か所設置しました。

注) 発表された内容を元に要旨を整理したものを、豊田氏に校閲していただき編集しました。

尚、写真・図版は、講演資料から引用しました。人物、建物の写真は個人情報保護の面から全て省略いたしました。

(編集責任:河地 清)

観光振興 資源生かせ



春日井市観光・にぎわい創出推進委員の初会合であ
いさつする藤市長（中央奥） 春日井市役所

春日井市が推進会議

計画策定へ有識者らの初会合

春日井市は五日、観光産業の振興に向けた指針となる「観光・にぎわい創出基本計画」策定に向け、有識者らによる推進会議の初会合を市役所で開いた。書やサボテン以外に「観光資源を乏しい」とされる高市。新たな地域資源を掘り起こし、体験型観光の開発や近隣から集客するマクローリスムの活性化につなげることを考えた。

春日井市には国宝天山城や小牧山のようなランドマークがなく、揃う番が多く上がった。特産のさだつた地産産業も育つていない。サボテンの商品化を長年取り組んで「住みやすいまちだが、人々には馴染みがない」「特産品やイベントは限られている」との意見が出された。春日井市と岐阜県多治見市にまたがる旧国鉄中央線線路跡「線路トンネル群」を巡っては、官民連携の不足が指摘された。

委員からは数カ月、一回のペースで計五回ほど開く。次回は十月の予定。来年六月に計画案をまとめ、パブリックコメントを経て同九月の公表を目指す。

将来的には計画を基に、市観光コンベンション協会の機能を強化し、観光庁が地域の観光戦略の司令塔として定める「地域DMO（観光地域づくり法人）」への登録も視野に入れる。

OPINION 2021(令和3年)8月6日

(金) 中日新聞記事 第11回「ふるさと

春日井学」研究フォーラム『行政による流通・商業政策はどうなって』いるか？一国の法律「まちづくり三法」と春日井市の総合計画・基本計画・アクションプラン』

(2014.1.5) が、本会副会長塚田忠雄氏によって発表された。その中で、春日井市第五次総合計画で策定された、「商業振興」

の項目では、「観光については、本市には「見るべき観光資源がない」として、「都市観光」のアプローチが必要だとする。魅力的・個性的な物販・飲食や産業観光、イベントで来訪者を拡大している。」

「道風記念館、密造院、落合公園、定光寺景勝、二子山古墳、旧下街道筋も観光地として来訪者を集める事は無理だということだ。もともと観光地は創られるものだ

という発想はない。」とその問題点を指摘しました。その後第六次総合計画（2018～2037）では、「地域の歴史や良好な景観など本市の特性や魅力といった地域資源を最大限に活かし、誰もが愛着と誇りをもって住み続けることができるまちづくりを進めます。」と意識は変化して来ました。「ふるさと意識」を踏まえた本質的な政策です。推進を期待します。しかし、ちよっぴり苦言を呈したいと思います。真に、春日井に愛着と誇りをもった「ふるさと意識」のある委員によって論議されているのでしょうか？客観的に第三者（識者）の意見も大変重要ですが、まず、春日井の文化、歴史、自然の特色、魅力を熟知した上で良きアドバイスとパブリックコメントをいただきたいものです。

(文責：河地清)

【会報編集後記】

- ※8/7 (土) 78回フォーラムの豊田洋一氏の講演は、「いきいき地域づくり」のテーマにぴったりの成功事例の発表でした。押沢台北（高蔵寺ニュータウン）の住環境の特性と、そこに暮らす人たちの創意工夫（アイディアに富んだ）と、地域の人資源が見事に活かされた事例です。
 - ※参加者からの質問：「住宅としては広い敷地の戸建てが均質に地域を形成していることが、利点である。暮らしの質も、意識も均質である。世代間ギャップが少なく、意思統一し易いのではないか。こうした住宅街だからできるのではないか」「町内会・自治会が衰退している地域に参考にできるか」「家先」という着眼点はすばらしい」「商店街と住宅街が混在しているような地域でどのような応用できるか」
- (文責：河地 清)

